

あるくみるきくしるす (前編)

本学科教員 大越公平

専門分野は文化人類学 (社会人類学、宗教人類学)
担当科目は文化人類学 I・II、民俗学、ゼミナール、他

今年度で定年を迎えます。10の質問をいただきました。日ごろは漠然と思っていることをしっかりとした目標にするためのよい機会です。「Q. ……」には、いただいた質問の言葉そのものを載せています。思いつくまま記してみます。

Q. 何故その分野を研究しようと思いましたか

A. 文化人類学という研究分野があることを初めて知ったのは高等学校1年のときでした。「極北に住むインディアン」という新聞の新刊書紹介記事を読んでもほとんど知識のない状態ではイメージできませんでした。本当に書店にあるのかなあとと思いながら出かけて行くと、新刊書のコーナーにその本がありました。須江(原)ひろ子『極北のインディアン』(現在は「極北のアメリカ先住民」と表現するべきでしょうか。当時はこの言葉が使われていました。)朝日新聞社1965。この本を読むことにより、これまで知ることのなかった人びと(民族)について知識が増えていくことの楽しさを感じた1冊です。文化人類学という学問があることを初めて知った本です。著者が2度目のフィールドワークに出たときに次のような感想を述べています。

ヘヤー・インディアンの生活環境のなかで、水にかえた魚のようにいきいきと生活する自分を感じて嬉しくなる日があった。そうかと思うと、やはり、よその文化を理解しようと努力するさいにつきあたる障害は大きいのだと思い知らされる日が訪れる。第二回目の調査のあいだには、このような二つの感慨を、何回となくくり返し感じるようになった。(136頁)

私も調査地で実感したことですので、とても印象的な叙述です。

Q. 先生にとって民俗学とは?

A. 私の郷里は新潟ですので、民俗学という言葉を知る前に、新潟・長野の山村の暮らしをまとめた江戸時代の民俗誌があることを知っていました。鈴木牧之の『北越雪譜』(岩波文庫 他)です。中学生でした。ただ、古文ですので十分に読めず、絵だけを眺めながら雪のなかの生活は大変な生活だなあと感じた記憶があります。

凡物を視るに眼力の限りありて其外を視るべからず。されば人の肉眼を以雪をみれば一片の鷺毛のごとくなれども、数十百片の雪花を併合て一片の鷺毛を為也。是を驗微鏡で照し視れば、天造の細工したる雪の形状奇々妙々なる事下に図するが如し。 19頁、1978 (1936)

雪の結晶の絵が掲載されていることも関心を持ちました。

民俗学者、柳田國男の文献を読み始めるのは、高等学校の現代国語の教科書に掲載されていた「椿は春の木」というエッセイで、椿が人の力(文化)によって照葉樹林帯の限界を越え、青森の夏泊にも自生していることをテーマとしたラジオ放送のためのエッセイでした。

信仰を持ち運ぶこの類の女旅人は、丹念に処々に実を播き枝を挿し、それが時あって風土に合して成長するのを見て、神霊の意を卜する風があったかと思われま。柳や桜もこの目的に用いられたという例はたくさんありますが、北の雪国に向っては、あるいは椿が最も適していたのではありますまいか。それと言うのもこの木

が霜雪を耐え忍んで、春の歓びを伝えることに鋭敏であったため、上代の朝廷が正月の卯杖・卯槌には、必ず椿の木をお用いなされたのも、またこの植物の名前に木篇に春という字を与えられたのも、決してでたらめでも思いちがえでもなかったらうと思います。

(383頁、『柳田國男全集』2 筑摩書房 1989)

Q. 先生にとって柳田國男とはどんな存在ですか

A. 日本民俗学の講義では、この学問の作り上げた柳田國男の研究を強調してきましたので、この質問があるのでしょうか。私が研究を進めるための「百科事典」でしょうか。研究したいテーマの先行研

究を探るときには、必ず柳田の研究を調べます。文献を通して何かのヒントが得られる存在です。私が大学の学部と大学院で教わった民俗学者は、柳田の教えを受けた人が多く、その先生方の講義で文献にはない柳田國男の人柄を知ることができました。

長野県の飯田市に柳田國男館があり、柳田が主催したかつての談話室を想像させる部屋があります。兵庫県福崎町には柳田の生家が保存された記念館があります。日本の伝統的家族、「イエ」を象徴するともいわれる「田の字型の間取り」を基本とした生家があります。

◎フィールドワークの一齣です。一つひとつ楽しい思い出です。



2003年2月26日
タイ北部、カレンの少年と



2014年3月29日
インドネシア、ボロブドゥール



2014年9月6日
日本文化探訪（沖縄、名護）



2016年12月27日
ミャンマー、バガン